

『夢の足音』

今年もあとわずか。院長としては新米の私にとって、大変な1年、楽しい1年、そしてあっという間の1年であった。思えば、2年前には今の自分は想像できなかった。函館おしま病院（旧・渡島病院）に来るとは思ってもいなかったし、院長になるなど考えてもみなかった。いや、何より函館に戻ることにすらまだ決めかねていた。函館を離れて長い年月が経っていた。

ちょうど2年前、2000年12月に私は自分の進むべき道を模索していた。長く在籍していた大学医局を飛び出し、福岡の栄光病院に勤めてから3年目の冬であった。大学を辞める時、私は見送ってくれた100人の先輩・同僚・後輩の前で『ホスピスをやります！』と宣言した。それまで私は、ホスピスへの思いを自分の中にしまいこんで、周りの人に話すことがなかっただけに、皆驚いていたようだった。とにかく私は一大決心で大学を飛び出した。1998年春のことであった。

栄光病院での初勤務の日は朝礼で一日が始まった。クリスチャンである3人の医師によりキリスト教病院としてスタートしたこの病院では、週3回は朝礼で1日が始まる。賛美歌を歌い、聖書から学びを得る。私は賛美歌で迎えられ、心新たにした。栄光病院には内科医として赴任した。もちろんホスピスでの働きが目標であったが、自分としてはまずこの病院で自分が医師として認められる必要があると考えた。救急指定病院でもあり、さまざまな疾患を抱える患者を1日に何人も受け持つなど、実に忙しい毎日であり、研修医のように院内を走り回りながら、診療に当たった。

やがて、私の思いを汲み取り、また臨床医としての力量を過大に評価して頂き、早くからホスピスを兼任という形ながら、実践できるポジションも与えられた。一般診療とホスピスを両立しなければならず、さらに忙しさが増したが、私は目標に一步近づいたことを実感していた。しかし、病院はホスピスという大きな看板を持ちながら、一方で一般医療、救急医療をも充実させなければならなかった。

私の夢、目標はホスピスであり、一般医療、ましてや救急医療にウエイトを置く気持ちは今さらなかったのだが、時間と身を削って働けば働け程、一般医療での活躍を期待された。やがて総合診療部長という肩書きを頂いたが、私の本意では無かった。

栄光病院では、病院全体にホスピスマインドが浸透しており、スタッフも素晴らしく、多くの学びを得た。そんな病院に感謝し、悩みもしたが、改めて自分の進むべき道を考えた時に、ここに留まることはできなかった。

3年間という短い期間ではあったが、ホスピスの現場で働ける自信も得たし、何より、“ホスピスは決して特別なものではないのだ”、という思いを確認することができた。



ホスピスを中心にやってみたいと考える私に、共感してくれた故郷の友人たちが夏頃から大きなエールを送り続けてくれた。『函館にホスピスを立ち上げたらいい!』。皆の息が吹き込まれ、私の夢がさらに大きく膨らんだ。走り出したその思いをもう止めることはできなかった。そして12月、函館へ帰ることを決めた。

思えば大学を飛び出した時には、地元函館に帰るなどとは思ってもみなかったのに、人の心は変わるものなのか…。学生時代からホスピス医療というものを漠然と考え、理想の医師像を心に置き、診療にあたった。そしてホスピスを知ることとなり、自然とそれを目指すこととなる。ホスピスをやるために大学を飛び出し、そしてまたホスピスを作るために福岡を飛び出した。

自分の夢…。

夢は手が届かないから夢なのかもしれないけど、今、2年前にはまだ聞こえてこなかった夢の足音が少しずつではあるが、確かに聞こえてきている。



(平成14年12月15日 著)